

1. 派遣国と活動したプロジェクトについての概要を教えてください。



派遣国：マラウィ プロジェクト： Farmers Club (HOPE)

派遣先予定であったHOPEプロジェクトが、Farmers Clubプロジェクトの傘下に入ったことにより、2つのプロジェクトで活動することになりました。

基本的にFarmers Clubは、現地雇用スタッフとフィールドに出かけ、コミュニティでDI¹としてやれること、例えば衛生・健康に関して（ほんの一例）のプレゼンテーションなど農家の人々に対して知識向上のための活動や、スタッフ・プロジェクトへのヘルプなどが挙げられます。



実践的な農業方法は、「40 GAIA Green World Action Book」²で学べますので、プロジェクトに入ってから、スタッフがその中から行う様々な活動のサポート、組織（プロジェクト・農家・スタッフ等）に関してアイデアの提案・助言などができると思います。

農家の人々以外にも、Self Help Groupといった女性たちのコミュニティボランティア、Pre-school（幼稚園）なども活動対象となりますので、農業以外の仕事も現場にはたくさんあります。

Farmers Clubは、いわゆるCommunity Developmentのプロジェクトで、単純に農業だけに関するプロジェクトではないですし、農民といっても基本的にコミュニティ内のほとんどがそうなので、アイデア次第でとても幅広く活動できるプロジェクトだと思います。

また私の地域では、まだHOPEの活動も多少残っていましたが、Youth Clubと呼ばれるHIV/AIDS予防活動を推進する青年グループ、またHIV-Positiveの人々が自分たちの生活向上のため組織するSupport Groupなどが活動していました。

2. プロジェクトでは具体的にどのような活動を行いましたか？

HOPEでは主にYouth Clubと一緒に活動していました。週2回行われるミーティングに顔を出し、毎週そのうちの一回で、他のDIが作ってくれた英語曲を教え練習をしたり、彼らオリジナルのHIV/AIDSに関する歌などをレコーディングしていたりしました。あるときは、彼らが求めているサポートのヒアリング等を行い、プロジェクトとの架け橋をしていたりしました。例えば、以前のDIが

¹ Development Instruct（開発インストラクター）の略称。プログラムに参加したボランティア、学生のこと。

² Humana People to Peopleと協働して活動を続ける団体GAIAが作成した、開発途上国で実用的、有効的な技術やその方法を説明した本。

していたことを再度活動開始するためにオフィスへ行ったり、半年に一度くらいずつある Ceremony において、その村の長老や孤児などをサポートするために一緒に活動してたりしました。



Support Group の方がたとは、主に週 1 のミーティングで顔を合わせ、彼女たちのプランを一緒に考えて考えました。例えば Income Generation Activity (収入創出活動) と呼ばれる資金運営において、どういったもの、方法なら一番効率よくできるか、また自分たちで持続可能になるかなどをスタッフと一緒に考案し、助言していました。また、Herbal Garden をスタッフと一緒にそれぞれのグループにおいて設立し、そのハーブや周辺にある植物などを使って、自宅で簡単に作れる薬などの作り方を教え、また健康維持のための知識やアイデアを提案していました。

Farmers Club のほうでは、主に CBO と呼ばれるコミュニティ、そして Support Group も混ざり一緒に Herbal Garden や Tree Nursery を作っていました。また家に呼び、スタッフと一緒に 1 日トレーニングを開催して、農業や健康、また薬の作り方などを教えていました。Income Generation Activity ですでに Honey Group を組織し、Honey ができるのを一緒に待ち、できあがり次第どういった方向性で売っていくかなどを検討していました。が、蜂が自分たちで蜜を食べてしまったことにより、さらに 3 ヶ月間以上待たなければならず、次の DI に託して任務を終えました。

またあるときでは、自分以外の DI のサポートを行ったりもしていました。例えば Primary School (小学校) での英語や音楽の授業で、パフォーマンスをし、1 日先生を交替することもありました。そしてあるときは、Vocational School (職業訓練学校) で 1 週間トレーニング (村人向け) を開催した DI がおり、私と同じ内容の活動をしていたこともあったため、一緒に参加し、サポートできる場所はしていました。



3. アフリカでの活動（プロジェクト・生活面の両方）は、ゆみこさんにとってどのようなものでしたか？大変だったこと、これには「怒った」ということ、逆に嬉しかったことやいい経験になった部分など。。。



派遣先予定であった HOPE プロジェクトが、Farmers Club プロジェクトの傘下に入ったことに、個人的には多大なショックを受けていました。今まで準備してきたことができないといった憤りや、不安などもあり、やはりプロジェクトに到着してからもなかなか状況を受け入れられずにいました。そこで、やはりプロジェクト・リーダーとぶつかることもあり、理不尽だと思ううちに、元々いた HOPE の DI たちと一緒に、Farmers Club の活動を半ば無視する形で HOPE を続けていました。

そんな中彼女たちの任期も終え、最終的に 1 人で HOPE をする形になったとき、やはりプロジェクトと一緒に働いていないことなどもあり、モチベーションは下がるし、マラリアにかかったり違う病気入院したり、と個人的にはとても辛い状況に陥ってしまいました。

身体が心配だったため、本当に辞めようかどうしようかと迷ったときに、休暇をとってリフレッシュし、それから心を入れ替えようと思い、いちからプロジェクトと向き合おうと思いました。

そこで、行く必要のなかったオフィスにも顔を出し、スタッフと一緒にフィールドに出かけ、一緒にプランをし、相談し、ヘルプをしと、コミュニケーションをとるようになってからは、自分の活動も生活自体そのものまでもが変化するようになりまし。

最後の 1 ヶ月に新しい DI が来て、同じような状況で Farmers Club に派遣された彼女に、私はこういいました。「私は一番初めに大きなミスをしたと思う。他の DI の意見はあくまで参考にすべきで、何が 1 番いいのかは自分の目で見て確かめ、それから行動すべきだった」と。

6 ヶ月を貫きとおし、最後まで諦めたまま終わらなかったことは本当に良かったと思います。私の態度が変わったからといって、意見の食い違いやコミュニケーションがうまくいかないことで、

プロジェクト・リーダーともめることがなくなったわけではありません。しかし、それでも、他のスタッフが私のために手伝ってくれたり、支えてくれたこともあり、必ずしもそれが「いけない」というわけではないと思います。



また、セミナー後、参加者の Support Group にそれぞれ Feedback をしてもらいました。その内容は様々でしたが、そのうちの 1 人の方が、「今までずっと足の痛みに悩んでいたけれど、今夜は今日作った薬を塗ったおかげでぐっすり眠れそう」とコメントしてくださいました。これには本当に嬉しくて、頑張って準備に奔走した甲斐があったなと思いました。

6 ヶ月は短い。だから何もできないだろうと思っていましたが、少しでも喜んでくれている顔を見れたことが何よりでした。淡々とした 6 ヶ月ではなく、悩み、苦しみ、後悔していましたが、周りの人々に支えられ、

最後何よりも自分で色々なことに気づけたことがとてもいい経験になりました。そして、本当にまた戻りたいと想いで終えられたことは、これからの私の原動力になると思います。

4. アフリカでの活動を終えて、改めて CICD での生活を振り返るとどのようなことが言えますか？CICD はいわゆる大学院のような専門機関ではなく、ボランティアを養成するトレーニング学校ですが、CICD での生活はアフリカではどのように活かすことができたでしょうか？

1 番言えるのはやはり、コミュニケーションの練習の場になったことだと思います。

本当に世界の様々な人々との共同生活というのは、一言で表せるほど簡単なものではありません。それはアフリカに行っても同じことでした。



文化・考え・価値観が違えば、一緒に生活していくということは早々簡単ではありませんし、一緒に何かをしようと思っても、時間がかかることです。しかし、様々な苦勞もありながら、後で振り返れば、あの 6 ヶ月で色々なことに対する柔軟性がついたと感じています。知識習得などの学習は、自分でできることだと思います。しかし、コミュニケーション、しかも 1 度に多国籍の人々となると、できる場所は限られてくるのではないかと思います。

アフリカでの生活はもちろん夢のように感じますが、行ってみれば思う以上に困難に遭遇する毎日となります。それに対して、どれだけ適応していけるかが鍵だと思います。

例えば私は CICD でキッチンの責任者をしていました。そのときに毎日のキッチンの担当を決めるという一見簡単そうな仕事でしたが、言うのとやるのは大違い。さりげなく変えてしまう人、勝手にさぼる人、文句だけ言ってくる人・・・様々な人や状況に対応するのは涙が出そうなほど辛い思いをしたこともありました。食は毎日のことですし、何十人もの人々が一同に会する食事時間のご飯が

出ないというのは大問題です。そういったことをマネジメントしていき、人と関わってうまく生活していくというのは、やはり実践しかないと思います。

そういった意味で、プロジェクトに行く前にCICDでこういった経験ができたことは、後で思えばよかったかなと思います。日本人的に言うと、アフリカは何もかもが遅い、不便、仕事がこれでもいいのかと思うものです。しかし、CICDでのワークショップのおかげで、それを文句だけで終わらせることなく、少しでも行動に移せるようになったのではと思います。

本当に、文句を言い出せばきりがありませんから・・・それよりも、もっと違うやり方を学べるとういと思います。

5. CICDのプログラムを終えて思うことを、ガイア、DI生活、アフリカでの活動を振り返りながら自由に書いてください。

まず私が1番驚いたのは、アフリカから戻ったときに意外にもとても楽しめたということでした。CICDといえばもちろん、勉強や街頭での雑誌販売などが中心で、生活を通して人間関係に頭を抱えることもたくさん・・・もう戻りたくないと思うところが正直な気持ちでした。

しかし、いざ帰ってみると、自分がすごした何ヶ月がどれだけ尊いものだったのかと気づかされました。辛い中でも支えあってきたチームを始めとする仲間がいてくれ、思った以上にその時間が大切だったんだと思えたからです。もちろん自分がどう過ごしてきたかで人それぞれだと思いますが、この1年と少し、このプログラムで私が一番得たものは出会った人でした。

チームメンバーにも恵まれ、最後まで色々はあったにしろ、最終的に残ったメンバーとは文句もなく、みんなで助け合うことができ、他のチームでも帰ってきててもいまだ連絡をくれる人、アフリカへ行っても、白人だからという目ではなく、私を1人の人として友達だと思ってくれる人々に出会え・・・そういった経験ができたことに感謝しています。辛かったからこそ、人との結びつきが密になったと思いますし、街頭での雑誌販売を通して出会った人々、アフリカではただの近所の人や商店のおじちゃん、ミニバスドライバーや隣に座った人など、全てが自分を成長させてくれる結果につながったと思います。

6. 最後に、CICDプログラム参加を考えている人や、これからアフリカ/インドへの派遣に向けて頑張っている後輩の学生に一言お願いします。



どんな理由でもいいと思います。やりたいなら、一歩踏み込んでいく勇気があれば、先はあると思います。そして、今CICDにいる学生さんに、努力してできる人やそうでない人も色々だと思いますが、常に周りの人と溶け込んでみてください。私はいつも自分で何かをやり遂げたというよりも、誰かに常に助けられた1年になりました。甘えるのではなく、支えあう。「仲間」を大切に、過ごしてくださいね。そして笑顔でアフリカ/インドへ旅立ってください！

2007年11月チーム 岡部 有美子